

## 【教訓】 144頁

母の友達ともだちの古川ふるかわというお婆ばあさんに大連だいいんで逢あったとき、「先生せんせいこの前まえ、朝鮮ちようせんの群山ぐんざんでは大変たいへんご心配しんぱいかけまして、すみませんでした。あんなに心配しんぱいせんでも、他力たうりきを他力たうりきと聞きかしてもらえば何なんのこともないのに、苦勞くろうせねばよかったと思おもいます」と言いったから「古川ふるかわさん、ある独身者どくしんものがお腹空なかすかして帰かえってきたとき、ちようど都合つごうよく隣となりから大きなおはぎを五つもらったので、お夕飯ゆうはんの仕度したくもしなくてよい、こんな有難ありがたいことはない早速さつそくご馳走ちそうになり、五つ目でうんうんいながら満腹まんぷくした。そのとき今の男おとこが『あら残念ざんねんなことをした、初めはじの四つを食たべずに五つ目を最初さいしよに食たべれば一度どに満腹まんぷくするのに』と言いったそうなが、その理屈りくつが立ちたちますか。四つの踏ふみ台だいがあつたから、五つ目で満腹まんぷくしたのでしよう。お育てそだてを蒙こうむり、難中なんちゆうの難なんを突破とつぱさされて初めて、あら、心得こころえやすの安心あんじんやの妙味みょうみが戴いたけるのですよ」

## 【聖訓】 247頁

私わたしが朝鮮ちようせんに二度布教ふきように行いきましたが、ある人ひとが初めはじの年としに煩悶はんもんして、「こんな難むづかしい法ほうなら聞きき始めはじめねばよかつた」と言いいますから、「法ほうが難むづかしいのではない、自力じりきの機執きしゆうが捨すたらないから難むづかしいのです。名号みょうごうに向むいておれば、みな他力たうりきの信者しんじやだと思おもっています、名号みょうごうは他力たうりきでも、自分じぶんの心こころは晴はれていないところを自力じりきの執着しゆうちやくというのです。その執着しゆうちやくを投なげ出すことことが難中なんちゆうの難なんであり、その峠とうげを通とおり抜ぬけたところに『あら心得こころえやすの世界せかい』があるのです。そこを通とおるのを三定死じやうじしといって、生命懸いのちがけになるのです。それを善導ぜんどうさまや聖人しょうじんさまにさして、自分じぶんはあら心得こころえやすばかり聞きいて実地じつちを通とおらないから喜よろこびは出でてこないのです」

次の年つぎとしに行いったときは、にこにこして「和上わじやうさん、あんなに苦くるしまなくても、唯ただの唯ただであつた」と言いいますから、「若者わかものの奥おく

さんが里に行つたので、主人が役所から帰つて夕飯の仕度をしなければならぬが、食へに行こうかと思つてゐるとき、隣のお婆さんが大きな牡丹餅を三つ持つてきた。大喜びでさつそく二つは食べたが、三つ目にはべえべえいほど満腹した。『しまつた、初めの二つを食べずに、三つ目を先に食べればよかつたに』と言つたそうですよ」

「まあそんなことを言いましたか、三つ目を先に食べたなら一つ目じゃに」

「お婆さん、あなたのことをつてるのですよ」

「何かしましたか」

「こんな苦しい信仰なら、聞き始めねばよかつた、あんなに苦しまなくても、唯の唯であつたのと言いましたでしょう。みな唯の唯の話ばかり聞いて楽に安心しているから、何年聞いてもはつきりした信仰にならないのです。始めは合点して喜び、中で難中の難で苦しみ、後に思いぶりも聞きぶりも、知つたもえたもみな役に立たなくなつたときが、自力の機執がつきて唯の唯になるのです。一つ二つを食べておればこそ、三つ目で満腹したので、三つ目を先に食べたなら一つ目ですから、あら心得やすにはならないのです」と言つたことがあります、信仰の順序を知らなければなりません。